ニュースレター
かけはし
vol.20
2014年5月
アメリカへの学位留学を支援する
米国大学院学生会

目次

寄稿: アメリカにおける東アジア研究 (孫 世偉) 1-2
特集: ケンブリッジでの博士課程 (山本 薫) 3-4
連載: 留学後記(4) 「留学したほうがいいですか?」 (橋本 道尚) 5-6
寄稿: Buildings-Landscapes Cultureプログラム (中村 優子) 7-8
新刊紹介: 『宇宙を目指して海を渡る』小野 雅裕 著 8
特集: UCSD Biological Sciencesの紹介 (本田 朋也) 9-10

寄稿: アメリカにおける東アジア研究

University of California Los Angeles
孫 世偉

孫さんとはUCLAで何度か同じクラスのTAをご一緒にさせてもらう事があり、彼の持つ日本史・日本文学についての知識の豊かさに、毎回驚かされるばかりです。今回はいつもの記事と若干違う方向性から日本研究に関わっている院生を紹介したく、孫さんに記事をかいて頂きました。アメリカの大学院という専門性が高い場で、日本研究が多岐にわたり多くの国際色豊かな方々が関わっているのは、この上なく嬉しいことです。(編集部:山田亜紀)

カリフォルニア大学ロサンゼルス校(以下、UCLA)、Asian Languages and Cultures博士課程二年に在籍する孫世偉と申します。専門分野といたしましては、日本の古典文学、とりわけ奈良時代を中心とする上代文学の研究を携わっております。この度は、ご懇意の知人の方から紹介を預かりまして、米国大学院学生会ニュースレターに寄稿させていただく運びになりましたけれども、UCLA及び自分の所属するアジア文化研究科の博士課程につきまして、簡単に紹介させていただきたく存じます。

1. はじめに

さて、個人的なあいさつから始まって大変見苦しいところですが、私は台湾の出身で、台北にある台湾大学の学部を出ました。UCLAの博士課程に入ったのは、実はアメリカにおける最初の留学経験ではありません。今の所属に先立ち、ニューヨークのコロンビア大学において、East Asian Languages and Culturesのプログラムで修士号(MA)を取得しました。向こうでの学業を終えたのち、一度は日本の企業に就職させていただきました。短い勤務期間を経て、UCLAから入学のオファーをいただき、仕事を辞めアメリカに再び舞い戻ったというわりと紆余曲折な経歴を持っております。

社会人や留学生として米国に滞在する日本人の方々に自分の経歴と専門を話しますと、大概驚かれる方が多く、会社を辞めてまで学問の世界に戻ること自体もさることながら、それより一番よく聞かれたのは、なぜにわざわざアメリカで日本の古典文学、しかも専門性の高い上代という分野を勉強するのかという質問です。勉強に戻りたければ、仕事を辞めてそのままどこか日本の大学院に入り直せばいいじゃないかと。この質問を答えることで、アメリカにおける東アジア研究やUCLAのアカデミック環境の説明にもつながると思いますので、簡単に紹介していきたいと思います。

2. アメリカにおける東アジアの文学研究の概要

ご存じの通り、確かにアメリカは多くの学術研究の分野において世界的にリードする立場にあり、トップレベルの研究機関や大学も数多く存在します。しかしながら、東アジア研究のフィールドは、地域研究(政治や経済を中心に)にせよ文化研究にせよ、自然科学や欧米関連の人文科学などに比べて、スタートが割と遅く、20世紀の前半になって、中国研究が産声を上げるのがやっとでした。日本研究に関して言えば、ドナルド・キーン氏やデ・バリー氏から始まり、辛うじて第四世代か第五世代が活躍し始めたのが現状です。さらに、日本は東アジア研究の大きな枠組みの中の一部門に過ぎず、スカラーシップの蓄積や研究史は、明治以降に建てられた日本の国文学の伝統と比べると、量的にはどうしても見劣

りすることが否めません。事実、私どもの従事している研究では、日本における研究成果を多量に引用したり、枠組みを考えたりする上で、大いに頼らざるを得ません。こういう事情から、つい最近まで、アメリカの日本文学研究は、作品の翻訳や、最新の研究成果を紹介する代物に過ぎないという印象を持つ方も恐らくいらっしゃるかもしれません。しかしながら、量的には圧倒的に少数な日本文学研究は、成長する勢いもあり、海外の学者による研究成果の質も、最近では日本の学界にも大変注目されつつあることは、ご存じのところかと思います。

3. 研究アプローチにおける日米の違い

日本研究、特に文学研究と言えばアメリカでもやはりマイナーな専門ですので、日本の国文学研究ほど細かく時代別やジャンル別の専門化はしていません。端的に言えば、アメリカで日本文学研究に携わると、あくまで古典から近代まで、何についても広く浅く知らなければならないしたたかさを研究者に求められます。日本の大学院のように、時代や作品を縦の軸ではなく、強い専門性を持つ個別の作品や文化現象を横のつながりから深く掘り下げる状況とは、だいぶ違うと言えるのではないか。

確かに専門性の意味では日本ほど細分化されていませんし、自分のテーマ以外の事柄も取り込まなければならないのは大変な作業です。しかし、逆に考えれば、このようなトレーニングや教育の仕方のほうが、より広い視野をもって、歴史や文学における特定の事象を眺める絶好のチャンスを提供してくれます。一つ具体例を挙げますと、私は前述の通り奈良時代、とりわけ八、九世紀の作品を研究させていただいていますが、前学期は、中国仏教をご専門の先生のもとで、明代初期の著名な知識人と、足利の後援を受け中国に渡った北朝の禅僧との繋がりを示す記録を勉強しました。「中世の仏教」と「上代の文学」とは、日本ではまったく違う分野だと考えられ、日本の大学院で上代を専門する方は、かけ離れた分野に手を出すことは恐らく少ないと思います。アメリカでは、むしろ知らない知識に進んで挑戦してみることを積極的に勧められます。無謀だからこそ、そこから得られるものが大きいと言えるかもしれません。ご記憶にある方もいらっしゃると思いますが、数年前に日本において「蟹工船ブーム」なる現象が起きました。「仕掛け人」島村輝氏の研究仲間でもあるシカゴ大学のフィールド氏は、今でこそ多喜二研究者として日本で知られておりますけれども、プロレタリア文学研究をなさる前に、源氏物語を初めとする平安時代文学の専門家でした。

4. アメリカ留学のメリットについて

アカデミック・トレーニングや問題意識の持ち方の違いについてお話いたしましたが、アメリカの大学院で勉強する何よりの利点は、国際的な環境の中で、異なった視点を持ちやすいことだと思います。私自身としては、UCLAではしばしば中国大陸や朝鮮半島の古典文学を専門とする大学院生たちと同じセミナーに出たり、意見交換を行ったりします。こういう交流の中に生まれるインスピレーションや「気づき」は数多くあります。日本の古典文学を研究する上、中国の古典や歴史などの知識は不可欠ですが、ここだと分野の違いにより生まれがちな壁や敷居を感じることが少なく、ごく自然に色々な知識を吸収し、糧にすることがしやすいと言えるではないか。「国際的」と申しましたけれども、これはもう言及するまでもないかもしれませんが、アメリカの大学院では、アメリカ本土に育った人たちだけでなく、世界中の国々から色々な文化的背景を持つ優秀な人材が集まるところです。違う価値観を持つ人との議論によって得られるものが、替えがたい貴重なものだと思います。どのような人たちがいらっしゃるのかというと、例えば私のアドバイザー（指導教官）を務めてくださるUCLAのDuthie氏ですが、幼少期にスペインで長年お過ごしのイギリス人の方で、アメリカで博士号を取得したのち、この国に留まり教鞭をとっていらっしゃる万葉集の専門家です。

5. 結びにかえて

さて、以上の数点にわたり、アメリカで日本文学を研究する自分の体験をご報告させていただきました。確かにアメリカに居ると、日本における学界の動向に疎くなったり、文献の入手が難しかったりするデメリットも否めません。ここでの体験は、研究者としてのキャリアを形成する上に、日本とはだいぶ違う道を辿らせるかもしれません。しかしながら、日本でもしきりに大学の国際化が提言されている中、英語による発信と意見交換は、これからますます重要になっていくでしょうし、何より東アジア研究自体は、まだまだ伸びる可能性を秘めています。お読みになっている学部生の方々に、日本を飛び出すという選択肢が存在することを是非とも心にとめていただきたいと思います。

筆者（写真右から三番目）とUCLAアジア文化研究科の院生たち、ドジャーズスタジアム外野席にて。違う国籍を持つ仲間同士で野球観戦を楽しむのも、アメリカならでは。

孫 世偉
University of California Los Angeles
Department of Asian Languages and Cultures

特集: ケンブリッジでの博士課程

The University of Cambridge
山本 薫

イギリス、ケンブリッジ大学で制御工学の博士課程に在籍している山本薫です。2011年10月に留学を始め、早3年が経とうかというところです。この記事では、日本ではあまり知られていない「イギリス留学」について、私の体験をもとに紹介します。

1. イギリスの博士課程留学

まず、アメリカ博士留学との大きな違いは、博士号取得にかかる年数だと思います。アメリカでは平均5～6年以上と言われているのに対し、イギリスでは大半の学生が課程入学後3～4年で博士号を取得します。次に、イギリスでは出願条件にGREを課さないところが多いです。GREとは主にアメリカやカナダの大学院に進学するために必要な統一テストですが、対策にはかなりの時間と労力を要すると聞きます。私は留学を考え始めた時期が遅かったこともあり、ケンブリッジ大学にしか出願しなかったのですが、GREが必要なかったのはとても助かりました。また、アメリカにはRA(Research Assistant)として研究室に雇われることで給料をもらい、学費や生活費を全額または一部カバーしてもらう制度がありますが、イギリスではこのような制度は基本的にはありません。Teaching Assistantとして授業の補佐をすることはありますが、給料は学費を賄えるようなものではありませんので、何かしらの奨学金をとってくるのが一般的です。私も、船井情報科学振興財団に支援していただいています。アメリカでもいい条件のRAがあるとは限らないので、イギリスのように奨学金で学費・生活費を賄っている学生も多いようです。その他、イギリスにはNHS(National Health Service)という国民保健制度があり、無料か安い金額で基本的な医療を受けることができます。これは外国人も対象となるため、留学生である私たちにはとてもありがたい制度です。

2. ケンブリッジ大学での博士課程

ケンブリッジ大学の博士号取得までの道のりが具体的にどういったものなのか大まかにまとめると、1年目は授業（専攻によっては必要ない場合もある。）と研究、1年目の終わりに審査、2年目以降はひたすら研究、3年～3年半ほどが経過したあたりから博士論文にまとめはじめる、3年半～4年以内に提出、口頭試問を経て、審査に合格すれば博士号取得、という流れになります。工学の博士課程の学生は、1年目には授業、Reading Clubなどを受講して単位を取得する必要があります。Reading Clubとは専門書を用いた少人数制ゼミですが、毎週大量の課題が出るため、学期中はほぼ毎日そのための勉強に必死でした。このように、授業やReading Clubで１年目はかなり忙しいのですが、その中で自分の研究も進めなければいけません。1年目の終わりには、1年間の研究成果と今後の研究計画についてのレポート(First Year Report)を提出するのですが、これをもとに今後博士課程を継続できるかの審査が行われるので、ある程度まとまった研究結果や今後の見通しが必要となるのです。授業の試験、Reading Club、First Year Reportと口頭試問を終え、無事審査に通過すると、Ph.D Candidateとして正式に認められ、博士号取得まで研究を進めていくこととなります。2～3年目は研究を進めつつ学会に行ったりジャーナルに論文を投稿したりというような生活です。この頃からTeaching Assistantとして学部生を教えたりもします。私は現在3年目ですが、博士号取得後の進路についても真剣に考え始めなければならない時期でもあり、研究以外にも何かと忙しくなってきました。ちなみに、博士論文の口頭試問はVivaと呼ばれ、Vivaを終えた時点で合否がわかります。無事合格した学生はその日にViva Drinkとしてパブなどでお祝いをすることが多いです。教員たち、ラボの同僚、ハウスメイトや友人たち、たくさんの人が合格を祝います。これまでたくさんの人のViva Drinkに参加してきましたが、早く自分の番が来るように頑張らなければ、と思っています。

Fig.1 カレッジのクリスマスホールにて。

3. ケンブリッジ大学のカレッジ制度

私の所属しているケンブリッジ大学は800年以上の歴史を誇る大学です。そんなケンブリッジ大学の最大の謎、それは「カレッジ制度」です。ケンブリッジには現在31個の「カレッジ」と呼ばれる組織があり、ケンブリッジ大学の学生は皆そのうちのどれかひとつに所属します。学生は通常カレッジが所有する家やアパートに住むことになりますので、ハウスメイトとは特に仲良くなります。ここまでだと、「なんだ、単なる寮じゃないか」と思われるかもしれません。しかし、侮るなかれ、カレッジは単なる生活の場ではなく、もっと複雑な機能を持っています。各カレッジは独自に財産管理をしている独立した組織であり、学生から支払われるCollege Fee（カレッジ用の学費のようなもの）、家賃の他、土地や株式による収

Fig.2 街中にそびえるKing's College。

入もあるようです。どのカレッジにも学長であるMaster、カレッジの運営に携わるFellow、他にも大勢のスタッフがいます。Fellowは主にケンブリッジ大学の教授、教員、研究者ですが、Fellowの中にも階級があり、責任やカレッジに関わる度合いも違うようです。また、Directors of Studiesという部門が、そのカレッジに所属する学部生の学業の進捗状況をチェックしており、問題のある生徒への対応を行っています。ケンブリッジにはSupervisionと呼ばれる少人数制の学部生用個別指導があるのですが、通常カレッジごとにペア、あるいはグループが組まれるので、学部生は必然的に同じカレッジのメンバーと過ごす時間が多くなります。大学院生がカレッジと関わる機会は学部生ほど多くないとはいえ、様々なイベントがカレッジ単位で行われるため、やはり大学院生にとってもケンブリッジでの学生生活はカレッジ抜きには語れません。まず、大事な入学式と卒業式。これらはカレッジごとに行われます。また、Formal hallという晩餐会もカレッジごとに行われており、そこではガウンを着用の上、ろうそくの明かりの下で夕食を食べるという、昔ながらの形式がとられています。Fig.1はクリスマスホールという特別の晩餐会で、ガウンは着ていませんが、代わりにBlack Tieというドレスコードがありました。その他、カレッジでクラシックコンサートが開かれることもあります。特にチャペルでのコンサートは雰囲気も良く、厳かな気持ちになります。このように大学院生である私にとっても重要なカレッジですが、いまだに「カレッジってなんなの?」と聞かれると答えに窮してしまいます。簡単に答えたいときは「ハリーポッターのグリフィンドールとかスリザリンみたいなやつ!」と言うようにしています。

4. ケンブリッジの街

ケンブリッジは小さな街ですが、生活に必要なものはすべて揃うし、治安もよく、とても住みやすい街だと思います。物価は高いですが…。街中にはカレッジの建物群が建ち並び(Fig.2)、また、緑

Fig.3 ケム川のあひるたち。

も多く、とても美しいです。川には鴨やアヒルや白鳥がいますし、街の外れまで歩けば放牧されている牛や羊に出会えます(Fig.3)。美術館や博物館も多く、非常に魅力的な街です。また、ロンドンやヨーロッパ各地へのアクセスも良いので、週末ふらっと遊びに行く、なんていうことも可能です。

イギリスでの留学生活の雰囲気が、少しでも伝わりましたでしょうか。日本にいるとアメリカ留学の情報のほうが集まりやすいのでイメージしづらいかもしれませんが、留学を考えている方は、ぜひイギリスも含めいろいろな国に目を向けてみてください。

ラボのクリスマスディナーで。

山本 薫
The University of Cambridge
Department of Engineering
Control Group

連載: 留学後記
最終回　「留学したほうがいいですか？」

Singapore University of Technology and Design
橋本 道尚

４月になりました。日本の４月は始まりの時期ですから、この文を目にした方も進学したり就職したり、何かのN年目の区切りを迎えた方も多いでしょうか。心機一転、みなさまが平穏で愉快なN+1年目を送られることを願っています。ところで出鼻を挫くようで恐縮ですが、大前研一さんが言った、こんな言葉があるそうです。

> 『人間が変わる方法は３つしかない。１番目は時間配分を変える、２番目は住む場所を変える、３番目はつきあう人を変える。この３つの要素でしか人間は変わらない。最も無意味なのは「決意を新たにする」ことだ。』

これによると、心機一転には意味がないと言うことです。私はせっかくの４月ですから気持ちを入れ替えて頑張ろうと思っていたのですが、非常に残念です。

これまで３回連載の機会を頂いて、留学説明会でよく聞かれる質問「留学したらどうなるのか」「就職はどうなるのか」「英語はどうなるのか」について所感を書きました。今回が最後になりましたので、留学というテーマにあえて拘らずに、米国大学院学生会の活動を通して感じたことを、つらつらと書きたいと思います。いつも以上にまとまりのない文章になると思いますが、どうぞご容赦下さい。

活動を手伝う理由

私は 2010 年の米国大学院学生会の立ち上げ前より、当会の運営に微力ながら携わっています。教育に興味を持っていますし、自分の経験を共有して人の役に立てれば良いと思いますし、長らく日本を離れてたので、日本のために何かしたいという純粋な気持ちもあります。友人と一緒に活動をすることも、新しい留学仲間ができるのも楽しいですし、社会にインパクトがあると思える活動をする高揚感も多少はあります。継続してきた理由にはそんな色んなものが混ざっているのですが、個人的には、この活動を通して留学の「既得権益」を潰したいと思います。活動のモチベーションが自己否定に帰するとは、哲学的に深遠なのかもしれませんし、衒学的な自己満足にひたる私の悪いクセかもしれません。よくわからないので、それはいずれお酒でも飲みながら考える機会があればと思います。

ここで「既得権益」というのは２つの違う意味で書きました。１つは「留学するための情報」に関してで、これは私自身の失敗経験にも関連しています。私は高校卒業後に留学をしたのですが、当時は家庭用のインターネットの黎明期で情報を集めづらい時代でした。高校３年生の夏休みの終盤に衝動的に留学を決めたこともあり、あまり検討もせず、とある留学斡旋業者を使用しました。留学斡旋業者から受けたサービスは粗雑なもので、この時に両親に支払わせてしまった対価を考えると、自分の選択を今も後悔しています。昨今はもう少し情報が得やすい時代になったかもしれませんが、情報を持ってない相手から金を搾取するビジネスに嫌悪感を持っています。賢い人は、市場原理に任せれば適正価格にいずれ落ち着く、と言うかもしれません。とすれば、留学の手続きに知るべき情報などは微々たるものですし、敷居など上げずに価格が下がるのが適正だと思いますので、それに近づく一助になればと思っています。

キラキラのラベルが貼られると、良い中身であっても、冷静に内容を判断する邪魔になります。

２つ目の「既得権益」は「留学そのもの」に関してです。昨今の安易なグローバルブームと相まって、こちらの方が日本社会では深刻に見えます。具体的には「ハーバード」と書かれた留学本が平積みになってたり、アメリカの大学の授業に「熱血教室」と元気な名前がついて、ありがたがられる雰囲気に現れています。この状況をビジネスチャンスに捉える人の出現は避けられませんが、自分たちの商品の価値を高めるために、留学や特定大学に価値を持たせようと誇張した描写があるのだとしたら賛成できません。「ハーバードのリーダーシップ」や「スタンフォードのイノベーション」から学びがないとは思いませんが、海外の大学は何にでも答えを出せる魔法の杖ではありません。留学は得難い経験かもしれませんが、留学経験者は激戦を勝ち抜いた帰還兵でもヒーローでもヒロインでもありません。衆目を集めるためのキラキラのラベルが貼られると、良い中身であっても、冷静に内容を判断する邪魔になります。そういう意味で、余計な利害関係者が介入せず、当事者の学生同士が直接繋がるこの活動に価値があると思っていますし、過大評価も過小評価もない留学の実状に近いものを伝えたいと思っています。

過去に書いたメールを読み返すと、活動の初期に「会の理念」を議論したとき、私は『「留学をすることがメリットとなるように社会に働きかける」では本末転倒である。そもそも我々の目的は「多様な生き方をする人を応援する」ことであり、留学したことが既得権益になる、(例えば、就職などにおいて)必須条件になるような社会になってしまうことは目指したくはない。』と発言していました。「理念」ですので、理想を述べた青臭さは差し引いてもらいたいですが、この考え方は今も変わっていません。

活動の中で感じたこと

少し話は変わりますが、この活動を通じて感じたことを１つだけ率直に書きます。他人に自分のことを決めてもらいたがる方や、自分が何かをしない原因を外部要因（親、先生、就活など）に求める方が意外に多い、ということです。例えば「先生が今年はダメと言った」というのはよくある話ですが、「だから留学できない」となってしまうのです。もちろん個別の事情はあるんだと思います。でも何だか物わかりが良くて、人の言いなりになることを選ぶ若い人が多いなあ、と感じました。よく言えば協調性があるとも言えるのですが、もし自分に「こうしたい」という希望があるなら、頑張って自分の気持ちを最優先する練習をしてみてはいかがでしょうか。人間関係を調整しながら我を通せるのも大事なことですし、そういうので失敗するのも良い勉強のはずです。

「留学したほうがいいですか？」

もちろん「自分で決める」ことの難しさは、私も知っているつもりです。たくさん考えなくてはなりませんし、選択の結果を逃げずに受け止めなくてはいけませんから、もう一大事です。「留学した方が良いですか？」と誰かに聞いて、他人に後押しされて、上手く行かないときの心理的な逃げ道を残したくなる気持ちはわかります。でもそれはぐっと堪えて、自分で決められるようになって下さい。実際のところ「留学するかどうか」なんかは「自分のことを自分で決められるか」に比べれば瑣末な話でしかありません。少し話が飛ぶのは承知ですが「自分で決めた価値基準を持つこと」は、生きる助けになると思います。何が大事であるかの判断を、他人や社会の多数決に委ねないことです。これは先に述べた既得権益の２点目とも関連していると思うのですが、大人になってまで、多数決や権威に何が大事か教えてもらっていても良いのでしょうか。

自分の価値基準を持つことも、それを信じることも大変で、少しずつ自信を積み重ねないとできないことだと思います。少し卑近な例を出すと、私はダジャレとか言葉遊びに分類されるものが好きなのですが、それを人前で披露することが正しいのか自信を持てずにいました。世の中には他者の創造性に対して「寒いオヤジギャグ」などと水をさす対抗勢力がおり、そういった逆風の中で自分を信じ続けることは容易ではありません。そんな葛藤の中、過去９ヶ月間複数の国に滞在しましたが、習いたての現地語を使って言葉遊びをする経験が、自信を持つ良い機会になりました。数多くの失敗を重ねる中で、自分の他愛ない冗談を同僚が面白そうに繰り返したり、プレゼンテーションで良い反応を得られたりと、それらの積み重ねが自分のやり方を肯定してくれたのです。ですから、今の私は、言葉遊びは素晴らしいものであり、人と人との関係を円滑にする関係構築のグローバルなツールであることに自信を持っています。どうでも良いことを仰々しく書きました。別の身近な例では、自分の言葉で考えを文章にして批判に晒す、私が今やっていることも、自分の意見を持つための１つの鍛錬だと思います。自分の考え方を信じられることは、一朝一夕にできることではありませんから、長い目で見て、自信を積み上げていくものと思います。

さて冒頭に戻ります。『人間が変わるのに･･･最も無意味なのは「決意を新たにする」ことだ』と、アメリカの有名な大学を卒業して、有名な会社で働いていた方が教えてくれました。この言葉は、インターネットの様々なところで紹介されています。「自分を律するのには外的要因が重要であり、内的要因には意味がない」というのがこの言葉の趣意だとすれば、それを指摘した権威による言葉を鵜呑みにしてしまうこと自体が、内的価値に従った判断かできるかのふるいとして機能するとも考えられます。何とも洒落の利いた自己言及性だと思います。内的な価値観を確固とするために外的なフィードバックが助けとなることも実際ありますし、この言葉の趣意に一理あることは否定しません。他方、ソーシャルメディアなどで大量にこの言葉を目にすると、内的な価値を育む難しさについて考える契機にもなっています。

私は、自分のことを知らない方に、自分が変われないと断言されることに違和感があります。自分がどうであるかは自分で決めたいですし、自分の意見に自信を持てるように、自分と向き合おうと思います。今月からシンガポールの大学で働き始めました。日本で桜の美しいこの４月に、決意を新たにすることで、これまでよりも進歩できるよう変わりたいと思います。

以上、過去４回にわたって「留学」とそれに関連する話題について、所感を述べさせて頂きました。大学の学部生を読者に想定して、たかだか10年程度長く生きているだけの私が説教くさいことを書いてしまったかもしれませんが、何かの参考になることがあれば幸いです。私は若い人の尖った選択を応援します。ぜひみなさんの体験も聞かせて下さい。

（留学後記　完）

橋本 道尚
Assistant Professor
Singapore University of Technology and Design

学科紹介:Buildings-Landscapes Cultureプログラム

University of Wisconsin-Milwaukee
中村 優子

2012年の秋からウィスコンシン大学ミルウォーキー校建築学博士課程に在籍し、同じウィスコンシン大学システムのマディソン校芸術史学博士課程建築史専攻との合同プログラムであるBuildings-Landscapes-Culturesプログラム(以下BLC)で学んでいる中村優子ともうします。私は東京大学工学部都市工学科都市計画コース(都市生活学・ネットワーク行動学研究室)を卒業後、英国のUniversity College LondonでM.Arch. in Urban Design(建築学修士都市デザイン専攻)の課程を修了しました。日本での設計事務所勤務・上記研究室での研究生を経て、昨年度からフルブライト奨学金を頂き2回目の学位留学中です。

ミルウォーキー市とマディソン市

ミルウォーキーはシカゴから列車で1時間半ほど北に行ったところにある都市です。五大湖の一つであるミシガン湖沿岸に開けた都市で、米国で30番目に人口の多い街だけあってダウンタウンにはバレエ、オーケストラ、オペラをはじめとしたエンタテイメントがたくさんあります。車を持たない場合市内の交通はバスで、大学はダウンタウンから10～20分ほどのところにあります。

大学と州の役所を中心に発達したマディソン(ウィスコンシン州都)はミルウォーキーからバスで1時間半ほど。小ぢんまりとした都市ですが、大学の近くはにぎやかで近くに内陸湖があり、夏はとても気持ちが良いところです。

ウィスコンシンの気候は北海道に似ていると言われます。昨年～今年にかけては冷冬だったため零下25℃程度になる日も数日ありましたが、夏はその分過ごしやすくミルウォーキーではほぼ毎週末のように何かのお祭りが開催されています。私は北国育ちではないので最初は冬の寒さに怯えていたのですが、今ではすっかり慣れました。

Buildings-Landscapes-Culturesプログラム

私の在籍するBLCは、2009年に正式に発足した新しいプログラムです。これまで1人の修了生がおり、今春に修了予定の学生が3人程居ます。全体では20名ほどのアットホームなプログラムです。

BLCはプログラム名が示す通り様々なスケールの文化的事象を扱っています。扱う地域は学生が自分で決めることができますが、基本的には最小単位となる建築物【Buildings】が景観、文化【Landscapes, Cultures】といった大きなスケールのなかでどのような役割を果たしているかということに興味を持っています。具体的には例えばですが、普通に生活している人間が毎日の生活の中でどのように建設環境【built environment】を使い、そういった日常の使い方が場にどのような意味を与えるのか(専門的にはplacemakingと呼びます)といったことを研究しています。

コースワーク(学士卒で3～4年、修士了で2年程度)ではこのような日常的な現象を観測するための方法論・それを説明するための理論を中心に学びます。各校には建築・芸術史だけでなく地理学・景観学・歴史学・民俗学・人類学の教授がaffiliatesとして居ますので、二つのキャンパスでこれらの授業を履修しながら興味のあるトピックに対するアプローチを指導教官と学生で話し合い、建築学の中での自分の専門分野【area of specialization】と専門外の副専攻【minors】を決めていきます。ミルウォーキーでは建築学博士としての、マディソンでは芸術史学博士としての必修科目がありますが、それ以外は学生の興味に応じて比較的自由にカリキュラムを組めるのが特徴です。

夏にはフィールド・スクールで実際に街に出て、建築物の記録の取り方、インタヴューの方法、その他の資料の扱い方を実践を通じて学びます(一昨年・昨年のプロジェクト、及び学部の授業と連動した今年の予備調査はウェブにまとまっているので、是非下記のリンクをご覧下さい)。夏のスクールは必修ではありませんが、フィールド・ワークは私たちの手法の中でも特に重要なもので、方法論のクラスなどでもフィールド・ワークを行うことになります。

Milwaukeeでのフィールドスクール (2013)

2012年　http://blcfieldschool2012.weebly.com/
2013年　http://blcfieldschool.weebly.com/
2014年　http://arch302.weebly.com/

私の場合

抽象的な話だけではわかりにくいと思いますので、恥ずかしいのですが私の場合を例に挙げましょう。私は建築学以外では、環境史・世界史・現代文学理論・社会理論・民俗学理論などの授業を履修しました。専門分野はplacemakingに関する社会行動理論で、副専攻は環境史と民俗学です。建築学は日本の大学では殆どの場合工学部にある専攻のため、こういった所謂「文系」なアプローチに戸惑う方も居るかもしれません。私が学部時代及び留学前に研究生を1年間させて頂いていた研究室も、人間の行動を微視的に研究するための量的【quantitative】方法論・理論を扱っているところでした。

私は元々、都市空間そのものよりもそこでの人間の行動に興味

がありました。都市デザインではワークショップなど参加型デザイン手法が用いられるのですが、私はそこで人間が交わす会話や仕草に興味を持ったのが切っ掛けで建設環境に関する日常のコミュニケーション全般に興味を持ち、どうすればそのようなミクロな現象を観測し記述できるのかということを考えるようになりました。現在ではテキストマイニング等も比較的簡単にできるのでシンプルなものであれば量的視点を持ち込むことはそれほど難しくはないのですが、私が上記のような学問分野にその理論や方法を求めたのは、計量化の前にある問題、つまり自分が観測していると思っている現象を本当に正しく「観測」できているのかといったオントロジカルなレベルまで突き詰めて考えてみたいと思ったからです。工学部の中で政策と近い距離にある建築・都市計画・土木計画などを学んでいる学生にはあまりなじみのない考え方かもしれませんが、私自身はBLCで学際的に学んだ結果、ようやく都市の日常生活に自信を持って取り組めるような自分なりの視点を構築できていると感じます。

Madisonでのフィールドスクール (2010)

最後に

前述のように、私たちは比較的新しいプログラムです。その分教授たちは若く非常に熱心で、とても厚いサポートがあります。学生としても自分がプログラムを作っていっているという自覚があるので、とてもやりがいがあります。日本では全く知られていないであろうこのプログラムを是非知って頂きたく、今回寄稿させて頂きました。学位としては建築学/芸術史学の博士となりますが、日本で都市計画学、地理学、文化人類学を学んでいる学生さんにも興味を持って頂けるプログラムだと思います。夏のフィールド・スクールのみの参加も可能ですので、興味を持たれた方は私までご連絡下さい。

中村優子
Buildings-Landscapes-Cultures Concentration
Ph.D. Program in Architecture
University of Wisconsin-Milwaukee

program website（アップデート中）:
http://www.blcprogram.org/
personal website:
http://nakamurayuko.wordpress.com/

新刊紹介:「宇宙を目指して海を渡る MITで得た学び、NASA転職を決めた理由」

当会代表・小野雅裕の著書が出版されることとなりました。MITへの出願からNASAジェット推進研究所転職までの時系列のストーリーを奇数章に、その過程で得た一般的な知見や哲学を偶数章に配する構成を取ることで、筆者のMITでの6年半を読者が追体験できるように書かれています。最近巷では「グローバル」をネタにした書籍が溢れています。しかし、本書の目的は留学を万人に「布教」することではなく、価値判断抜きに筆者の生の体験を語ることで、日本の学生たちがそれぞれの夢を叶えるためのベストな道を選ぶ判断材料にしてほしい、との趣旨で書かれており、これは米国大学院学生会の活動目的とも合致するものです。（当会の設立の経緯についても一章を割いて書かれています。）留学を目指すと心を決めている人にももちろんですが、むしろ迷っている人にこそお勧めしたい一冊です。

『宇宙を目指して海を渡る MITで得た学び、NASA転職を決めた理由』
小野雅裕著　東洋経済新報社
4/25発売 1620円（税込）
アマゾンより電子版も刊行予定

特集: UCSD Biological Sciencesの紹介

University of California San Diego
本田 朋也

「生物と機械の違いって何やろか?」。こんな問いから始まった授業が、後に私が生物学を志すきっかけとなりました。私は工学部に入学したものの、もともと“生き物“というものに興味がありました。そして、大学入学後にいくつかの生物学の授業を取ってみましたが、そこでは生物を構成しているパーツの機能や構造ばかりが語られ、非常に雑然としていてまとまりがない印象を抱きました。しかしながら、大学3回生のときに受講した生物物理学の授業の中で、いくつかの生命現象が物理学の知識を用いて数学的な形で説明できることを知りました。とりわけ印象的だったのは、当時の教官であった四方哲也先生の言葉でした。「生き物って機械と違ってフラフラしてんねんな。けど、フラフラしてるからこそ様々な環境に適応したり進化できたりするねん。」と。そして、その生物を生物たらしめている“フラフラ”なるものが、徐々に最新の研究で明らかになってきているということでした。どういうわけか、そんな風変わりな説明が当時の私を強く魅きつけました。

偶然にも、私はその年の夏にアメリカの大学を見学する機会がありました。美しい建物と芝生に囲まれた広大なキャンパスを目の当たりにして、主な生活の場がコンクリートジャングルであった当時の私はとても感動しました。それまで私は、日本の大学院にそのまま進学する予定でいましたが、この出来事を境にアメリカの大学院に行くことに興味を抱くようになりました。そして、時が経つにつれて徐々に思いは強くなってゆき、多くの方のサポート得ながら出願まで辿り着くことができました。結果的にいくつかの大学からオファーを頂くことができ、とりわけQuantitative Biologyと呼ばれる融合領域を積極的に押し進めているカリフォルニア大学サンディエゴ校(以下、UCSD)は魅力的でした。

大学の隣にある自然公園Scripps Coastal Reserve
より眺める太平洋の夕焼けです。

カリフォルニア大学サンディエゴ校

UCSDはダウンタウンから北に車で約20分のLa Jollaという地区にあります。La Jollaとはスペイン語で宝石を意味し、その名の通りキャンパス周辺の街並みは非常に美しく治安も良いです。また、気候は年間を通して温暖で快晴の日が多く、キャンパスから徒歩で海岸まで行けるため、大学構内では水着を着てサーフボードを持った学生たちをよく見かけます。大学の周囲にはソーク研究所やスクリプス研究所などの世界的な生物医学の研究所をはじめ、QualcommやilluminaなどのIT世界を代表するテクノロジー企業の本社が置かれています。また、これらの研究所や企業で働いている日本人の数は非常に多く、市内では日本食のスーパーマーケットやレストランなども充実しています。

Division of Biological Sciences

私の所属する生物学科のPhDプログラムには、毎年約30人程度の学生が入学し、留学生の比率は大体30%です。日本人は現在のところ各学年1人ずつ計6人が在籍しています。ノーベル医学・生理学賞を受賞した利根川進先生も私たちの大先輩です。学生の興味のある分野は様々であり、1年目のラボローテーションを通して博士論文のための研究室を選ぶことになります。研究室が決まると各専門分野に特化していきますが、毎年夏に開催されるリトリートや定期的なハッピーアワー、学生同士のメンター制度など、分野や学年を超えて交流できる機会も多く設けられています。また、日本から来た私にとっては驚いたことに、博士課程における女性の割合が非常に高く、私の学年では28人中19人が女性です。

授業の様子

私の学科では、一年生の間に全てのコースワークを終えることが推奨されています。必修科目の授業では、微生物から幹細胞・神経科学に至るまで幅広い生物学の諸分野を網羅し、最先端の研究に用いられている手法や機器についても学びます。授業は、レクチャー形式よりも、最新の論文をもとにしたセミナーやディスカッション形式が多く、テストやレポートでは、論文の批評やプロポーザル(研究企画書)を書くことが中心です。生物学の論文では、実験条件が不適切なために誤った結論が導かれたり、一連のデータの解釈が一意的に決まらないということが多々あります。なので、こういった学問上の特性を踏まえて、一年生の間に論文を批判的に読んでディスカッションすることを通して解決策を導くことを徹底的に訓練されます。

ティーチング・アシスタント

私が所属する学科では、PhD課程の間にティーチング・アシスタント(以下、TA)として計3クォーター間働くことが義務づけられています。私はこれまでに、学部生向けの遺伝子組み換え実験の授業を担当しました。このクラスでは、各TAがそれぞれ約25人の学

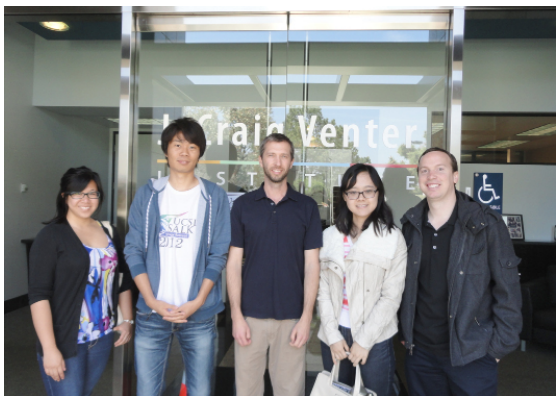
部生を受け持ち、講師の先生と協力しながら毎週２回４時間ずつの学生実験をサポートすることになっています。毎回、入念に準備して授業に挑むものの、予期せぬ実験ミスや学生からの質問にうまく対応できずに落ち込むことが何度もありました。その一方で、ほとんどの学生が積極的に授業に参加し、私の板書による説明を真剣に聞いていたことには大きく感動しました。TAは確かに研究の時間を大きく削り、語学面でハンデのある留学生にとってはとりわけ大きな負担となりますが、その代わりに得るもの（英語力、コミュニーケーション力、…そして達成感）は間違いなく大きいと言えます。

研究室の様子

メンバーの国籍は様々で、現在のところ約半分がドイツ人で、アメリカ人は1人しかいません。また、世界各国から頻繁に先生や研究員の方が訪問に来るので、人の出入りがとても多いです。研究内容としては、様々な外部環境の変化に対して細胞がどのように対応しているのかを、実験と理論の両方を用いて明らかにすることを目的としています。ポスドクの中には博士号を理論物理学で取得しており、生物学の実験を経験したことがない人も少なからずいます。実験設備に関しては必要最低限のものしかなく、約30年前の中古の培養槽が現役で活躍している具合です。しかし、限られた予算や設備の中でも、皆それぞれが自分たちで必要なものを設計•工作したり、時には他のグループと共同研究しながら、各自が独立して自由に研究できる環境にあると思います。

最後に

留学での日々は、思い通りにいかなくて悩むこともあります。そのような中で、私はサンディエゴという土地の力に何度となく助けられたように思います。研究から得られる知的な刺激はもちろんのこと、この街が魅きつける様々なバックグランドを持った人たちとの交流は、悩みを乗り越える大きな原動力となります。そして何よりも、南カリフォルニアの青い空と広い海、そして美味しい食事と地ビールは何事にも代え難いものです。留学先を選ぶにあたっては、研究内容やランキングなどに加えて、留学先の土地柄との相性を考慮してみてはいかがでしょうか。



J. Craig Venter研究所にてクラスメイトと。（＊左から２人目が筆者です）

本田 朋也
Quantitative Microbiology
Division of Biological Sciences
University of California, San Diego

米国大学院学生会 http://gakuiryugaku.net/

［ニュースレター編集部］

原 健太郎　石原 圭祐　高野 陽平
山田 亜紀　辻井 快

newsletter@gakuiryugaku.net

執筆者を募集中！

編集部では、ニュースレターかけはしに掲載する記事を執筆してくれる方を募集しています。ご興味のある方は、上記のメールアドレスにご連絡下さい。また当学生会の他の活動（留学説明会、メンタープログラム）に興味のある方は、当会の学位留学経験者オンライン登録システムに参加お願いします。
http://gakuiryugaku.net/mp/mentor/login.php

編集後記

米国大学院学生会の Facebook ページができました。 http://www.facebook.com/gakuiryugaku
こちらのページから「LIKE」「いいね」をクリックして頂くと Wall に書き込みできるようになります！

夏の4ヶ月間、カリフォルニアにある国立研究所でサマーインターンシップを行うことになりました。ここ4年間の博士生活を過ごしたミシガンを離れて、チャレンジングな研究を行うこともさることながら短期間西海岸の生活を体験できることがとても楽しみです。（原）

大学院に入ってから、研究の合間をぬってよく学校周辺やジムでジョギングをするようになりました。運動をした後の方が何かと研究により専念できているような気がします。西海岸、特にロスの気候はとても気持ちいいものです。（山田）

日本は新年度でもこちらは学期末。試験に向けてラストスパートをかける桜のシーズンがやってきました（といってもなかなか桜にはお目にかかれないのですが…）。今年は花粉アレルギーに振り回された一学期でしたが、学期末くらいは花粉を吹き飛ばす勢いで慌ただしい時期を乗り切りたいです。（高野）

今回初めて同じ生物学者の記事を担当しました。割と近い分野で頑張って居られる方の記事を読んでいると、応援したくなるやら励まされるやら、良い刺激になりました。（辻井）

今朝アパートのボイラーが破裂してお湯が出ない状態です。大家さんの迅速な対応に期待。（石原）